

浄土

1988—8

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別投函記録雑誌) 第三二五号
昭和六十二年七月二十五日印刷 昭和六十三年八月一日発行
第五十四卷 八月号





八月の秀句

白地きて夕ぐれの香の来てをりぬ

森 澄雄

流灯を灯して抱くかりそめに

橋本 多佳子

大文字を待ちつゝ歩く加茂堤

高浜 虚子

八月号



是のもろもろの鳥は、皆これ阿弥陀仏の法音をして、宣流せしめむと欲して、変化して作したまえるところなり。

——『阿弥陀経』

目次

法話

お盆におもうこと……………坂野泰巨……(2)

=にこここ法話④=

ミーちゃんの宿題……………長谷川 岱 潤……(19)

《特別寄稿》

存続上人作「世界大相図三幅対」……………後藤真康……(8)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <17>

海と山の狭間で

……………木下隆一……(25)

——我が思い出に住む犬たち(3)——

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第50回《最終回》

……………寺内大吉……(31)

弥陀の化身

挿絵 松澤 達文

表紙絵 小林治郎画

(法)

(話)

お盆におもうこと

へ盆はうれしや 別れた人も

晴れてこの世に 会いにくる

お盆というと、「かけ袋」が思い出されます。新盆を迎える家では、親戚縁者から「かけ袋」が新亡のために届けられます。それを菩提寺の施餓鬼会にご供養するという習わしであります。

「かけ袋」というのは、晒(さらし)の布で四角または三角の袋をつくり、その袋にお米を



坂さか野の泰たい巨きよ

(茅ヶ崎市西蓮寺住職)

一升ほど入れて麻あしひもで結ゆき、それに、わらじ、扇子、針と糸、小銭、手拭などもいっしょに結ゆえたもののことです。

これは新亡が、初めてのお盆を迎え、この世に会いにきてくれるので、道中、この袋を肩にかけてもらい、何かと困らないようにというこの世の者の心づくしの品であります。

今日でも「かけ袋」の習慣がのこっており、形こそかわりましたが、お盆の風物詩であります。

お盆は、お釈迦さまの十大弟子の一人、神通第一といわれた目連の、母を思い母を慕う心から出発しています。

お母さんの死後の世界を知ろうと、神通力を試みたところ、なぜかお母さんは餓鬼道に堕ちていたのです。

目連といえども、お母さんを救う手だてはなく、ついにお釈迦さまに教えを乞うたのです。

餓鬼道とは一体いかなるところでしょうか。「人間がこの世でおこなったむさぼりの報いとして、飢えや渇きの苦しみが満ちている世界」であります。

なぜ、お母さんは餓鬼道に堕ちたのでしょうか。

お釈迦さまは、「お前の母の罪が重く、お前の力ではどうにもならない。七月十五日

(仏歡喜・僧自恣の日)に、生みの父母、過去七世の父母のために、百味飲食、五果などを供えて、十方の衆僧を供養しなさい。そうすれば惡道の亡者は救われる」と教えられました。

生前の「罪根が深い」ゆえに、お母さんは餓鬼道に堕ちたというのです。

目連のお母さんは、心のやさしい人だったのです。しかし、そのやさしさは目連や身近な人たちにとってはそうであったのですが、他の人たちに対しては心配りがなく、利己的で、何かと迷惑ばかりかけることが多かったのです。

親ならばだれでもそうであるように、わが子が転べば心を痛めますが、他の子に対してはそれだけの心配りをいたしません。

「わが子」「わが子」ですごしたお母さんの一生であつたと思うのです。

父母恩重經に、為造惡業の恩（もし、子のために、やむをえざることあれば、みずから惡業を造りて、惡道に墮つることを甘んじてうける）や、究竟憐愍の恩（おのれ生きている間は、子の身に代らんことをおもし、おのれ死にさりて後は、子の身を護らんことを願う）が挙げられています、母たるもの、これすべて「わが子」のためだったので。

子は親になるまで、またはある年齢までそのことを知るよしもありませんが、母の人生をそのようにさせたのは、言いかえれば、わが子（目連）であると言わざるをえません。まことに不思議な母と子との因縁というべきであります。

芥川竜之介の作品に「杜子春」というのがありますね。

大金持と貧乏をくりかえした杜子春は、人

の薄情さを知り、仙人を志願しますが、仙人からいかなることがあっても口をきいてはいけない、と言われます。地獄におとされ、閻魔から問われても口をきかないので、畜生道から父母がやせ馬となつてつれて来られ、父母が責め苦にあいます。それでも杜子春は口をききません。そのとき、息絶え絶えの母が、「お前がしあわせになれるのなら、私はどうなつてもかまわないよ。だまつておいで」と言います。

母親は、こんな苦しみの中にも、息子的心を思いやつているのです。

杜子春は、ついに「お母さん！」と泣き叫んだのです。

「父母の身を思う子はある。父母の心を思う子は少なし」と言つた布教家がいますか、お盆の行事は、まさに、この「父母の心を知る」ところから始まつていのではないでしょう

か。

母なるものは、いかなる時代でも、たとえ餓鬼道に墮ちようとも、わが子のためにはあの父母恩重経の十恩にあるような姿が、本来あるべき姿とされてきました。

しかし、今日の母親像の中には、それとは反対に、エゴイスティックな母親が多く、子どもを破かいする存在となっているとも言われています。

ひととき、わが国では「父性なき母性社会」という言葉が流行しました。

河合隼雄氏は、「母なるものの力は、〃包含する〃力であり、すべてのものを良きにつけ悪しきにつけ包みこむ。これに対して、父なるものは、〃切る〃力をもっている。これは、ものごとを上と下に、善と悪に、物質と精神に、などとわけて考える。父性と母性のふたつの原理が人間の生き方の中に働いてい

るが、わが国の文化は明らかに母性の文化に属している」とのべ、現代の父性の存在感はうすく、変容しているというのてす。

松本滋氏は、「女性的なるもの」に四つのタイプがあると言っています。それぞれはプラス・マイナスの二側面をもっています。

一、「母親型」には、慈母的側面と恐母的側面をもっており、二、「妖精型」には、恋人と娼婦の側面をもつ、三、「女僕型」には男まさりと男おんなの側面をもち、四、「人形型」には、乙女とねんね、といった側面をもっているのだそうです。このなかで、特に「母親型」についてみてみますと、これは母性的な女性のあり方で、母性本能の強いタイプです。

母性の基本的な特色は「包み容れる」ということにあり、プラスに働く場合には慈くみ育てる「慈母」のイメージとなります。

ところが、この母親型がネガティブならわれ方をすると、過剰な保護、世話のやり過ぎなどといった形で、保護の必要がなくなつたものにまでからみつき、かまひ続けるのです。子どもだけが生き甲斐であり、自分は犠牲になつても子どものためにつくしてしまふので、「喰いつくす母」、つまり子どもを食べてしまふ「恐母」と名づけられています。

ごぞんじのように、戦前の日本における「女性的なるもの」のイメージは、人形型を含みながら、全体としては母親型であつたわけです。そこで今日の状況をみると、母親型が支配的になっていますが、その中でもネガティブな側面が目立ってきています。そして女傑型、妖精型の女性が増えてきているといわれます。

つまり、「慈母」よりも「恐母」が増えていくそうでした、まことに心配であります。

目連のお母さんは、慈母のイメージに、ややネガティブな面が加わつたタイプかもしれません。

目連のお母さんと時代も立場も異なります、比較になりませんが、現代のお母さん方が慈母のイメージでなく、恐母のイメージであることに不安をおぼえずにはおれません。子どもの将来が心配でなりません。

木村栄氏は、「父親不在とは父親の役割をはたしていないことだ」とのべているように、父性なき母性社会といわれるゆえんがわかります。

そのうえ、母性が恐母になる傾向が増大していることを思うとき、木村栄氏が、心理学者ハローの子ザルの実験を引用して、「毛布の母」の存在を強調しています。

「子は母に、お母さんがそこにいるということ、そこにただいるということ求めてい

る」というのです。それは、「子どもを子ども自身にまかせる自然のはぐくみ」であるというのです。恐母ではないのです。

恐母は、いかなる悪道に堕ちるのやら、わかりませんが、子どもは「仏の子」であることを思いおこしていただきたいのです。

「仏の子」、つまり「仏」とは「父性」(智慧)と「母性」(慈悲)をかねそなえた存在であります。

仏より授かった子どもを、「仏の子」として育てることが、親の使命なのです。

目連は、餓鬼道に堕ちたお母さんを救うため、お釈迦さまに教えを乞われました。

今日のお母さんが、母なるもののもつ最も基本的な「包み容れる」ということに発しているながら、母子癒着による弊害が叫ばれています。それは、恐母というマイナス面の方向

にすすんでいるからです。

仏教は、母性の宗教であるといわれています。

世のお母さん方も、仏さまの教えに耳を傾けていただきたいのです。これが、お盆行事の原点ではないでしょうか。

お盆は母の日でもあります。

中野善英上人は、

「母の日に母を憶いぬ

亡き母に似そめし

おのが手を眺めつつ」

と教示されています。この心境をじっくり味わってみてください。

子どもから、いつの日か、母をしのんで、お母さん!と呼ばれる日のやってくるのが、やがて救われる身にさせていただけるときなのです。

存統上人作「世界大相図三幅対」

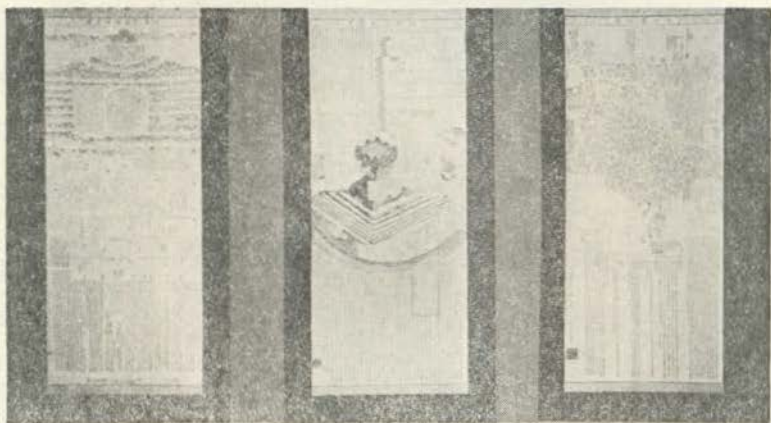


後藤真康

(東京・江東区円通寺住職)

まえがき

筆者が幼い頃、床の間の掛け軸になんとも不思議な形の山や古風な地図を描いたものがかけられていて、何だろうと思ったのを覚えている。のちになって、ふと、あれは仏教の世界観を書いたものではないかと気がつき、父（先代住職、願誓真雄）に尋ねたところやはりそうであった。これは当寺に縁のある存統上人という方が書かれた「閻浮提図」「世界大相図」「天竺輿地図」の三部作で、当寺の寺宝であることを知った。面白いなとは思ったものの、畑ちがいの学問（農芸化学）に身を入れていたこともあって、子細に眺める余裕がなかった。父も存統上人作の開山靈巖上人の伝記や観経曼陀羅の研究が先にな



——「世界大相図三幅対」——

ってこちらには手が回らないようであった。その後、チベットのマンダラの展覧会の際出版された、杉浦康平・岩田慶治著「アジアのコスモスとマンダラ」(講談社、一九八二)のなかに、存統上人の須弥山図を奇麗に着色したものが掲載されているのを見つけた。出所は書いてなかったが、昔頒布された図にどなたかが色を塗られたものである。父も改めて興味を覚えたようで、昭和五十九年、存統上人の百五十三回忌を機会にお檀家の印刷所に三幅対を面積三分の一の写真製版に縮小して印刷してもらった。そして自分なりに色を付けたり関係資料を集めたり霊巖一山の寺院や有縁の方々に頒布したりしはじめた所で父は急に他界してしまった。父の遺志を生かしたく最近暇をみて内容や背景を調べはじめたのが、何分にも筆者の手にあまることが多い。宝の持ち腐れになることをおそれ、ここに筆者の雑感めいたことを付して紹介させていただき、有識の方のご教示を乞う次第である。

大相図作成の経緯

存統上人、法名を輪蓮社転誉上人覚阿十故専法存統大和尚と称される。但馬国大月村小川氏の出で、八歳で得度、江戸深川霊巖

寺において浄土の宗義を研鑽された。文化六年より靈巖山内の僧房円通窟（現在の円通寺）の寮主となり、さらに靈巖一山の学頭に進んだ。天保元年六月から、三河国岡崎松応寺に住し、同三年七月十一日（一八三二）五十一歳で逝去と伝えられる。（生国と行年は但馬国円竜寺の過去帳による。）同四年六月発行された「道本開山・雄誉靈巖上人伝記」四巻は存統上人校修の遺稿である。上人は広く諸学に達せられ、文化五年（一八〇八）八月、二十七歳にしてまず「閻浮提図付日宮図」を印行、ついで文政四年（一八二二）「世界大相図」を、同十一年（一八二八）「天竺興地図」を相次いで印行された。これらはそれぞれ幅五十六センチ、長さ百三十センチで桜の一枚板に刻されており、その版木は円通寺に寺宝として保存されてきた。次第に虫害がひどくなり、印行不可能となることを恐れた円通寺住職乗誉真峰和尚は大正十年最後の印行を行って頒布したが、大正十二年九月一日の関東大震災により版木と共にその殆どが焼失してしまった。幸いにも岡崎松応寺に最後に印行されたものの一部があることを知り、先代住職がこれを受け請い、戦災の際にも焼失を免れて現在円通寺の寺宝として保存されている。これを前記のように昭和五十九年に縮小印刷し、有縁の方に頒布している。

この三幅対の完成には二十年を要しており、最初から三部作として構想されたものかどうかは明らかではない。しかし二番目に印行された世界大相図にのみ序文があること、閻浮提図の解説文中に「予如著『世界大相図』の文字があることから見て、その可能性が大きい。また、後述するように三部作とみることに意義があるので、ここでは全体を『世界大相図三幅対（略して大相図）』と呼ぶこととした。

大相図の序文

世界大相図の下三分の一は「世界大相図序」という文章で占められている。返り点のみで句読点のない漢文なので筆者には正確には読み難いが、わかる範囲で判読するとおおむね次ぎのようなことが書かれている。

『およそ宇宙の形態は華嚴經によれば形も数量も無尽で写すことはできない。しかしこれは大乘の教えで小乗の仏典によれば必ずしも写せないわけではない。ここに図示した須弥山世界には欲界色界無色界の三界があり二十五有を区別している。(中略)いま世に博識と称する人が宇宙を論じ、欲界のうち人間界の僅か一部を見て万国と称し過去数千年のこのみを知って未来のことは少しも知らず、それで最高と思っているのは井戸の内の蛙に等しい。自分は幼少のころから宇宙の構造やその過去、未来について深い疑問をいだいていたが、成長につれますます疑問がつのってきた。ある日、師の教えに従って俱舎論の世間品を読んだところ、宇宙の形態と大ささ、三界の別、成住壞空の歴史変化に至るまで詳細に論じてあり、長年の疑問が氷解して喜びに絶えなかった。そこで同じ疑問を持つ人のないようにこれを図写したのである。須弥山世界の図は既に数種あるがいずれも粗略である。近年「仏国曆象編」が出版された。これは曆法の根源を明らかにしたもので、天文のことについては頗る詳しく、内外の書物を根拠として西洋の学者の誤りを正している。天文を学ぶ者はこれを読むべきであるが、私の図とは意図するところが異なっている。(中略)須弥山等の諸天、諸山は人間界よりはるかに大きい、この図では小さいものは大きく、大きいものは小さくして一図にすべてを現すようにしたので了承されたい。』

閻浮提図の内容

三幅対のなかでは「閻浮提図付日宮図」が最初に書かれている。本図には序文的なものではなく、図の中央部分には今日のものとほとんど変わらない世界地図が描かれている。形態、地名等かなり詳細で正確である。江戸時代も化政期ともなればオランダ経由で伝わった新しい世界地図が民間にも流布していた。たとえば、司馬江漢は寛政四年（一七九二）に「地球全図」を銅版画で出版し、橋本宗吉は「新訳地球全図」を寛政八年（一七九六）に出版している。従ってこの程度の図はさほど驚くにはあたらないかも知れないが当時としては最新の知識によるものであることは確かである。

この図では天竺（インド）が中央におかれ、アメリカは載っていない。右端に僅かに顔をだしているのがそうかとも見えるが、これには「勝猫牛州」と書いてある。オーストラリアにも「猫牛州」の文字がある。猫牛州、勝猫牛州の原典は未詳であるが、閻浮州に付属する二中州（遮末羅、筏羅遮末羅）に想定しているものと思われる。アメリカをはぶいたのは後述する理由によるものである。

世界地図の上には一層の山脈、九層の森林を隔てて巨大な「閻浮樹」が描かれ、その上には「尼民陀羅山、尼民陀羅河」がある。九層の森林に重ねて、付図である「日宮（太陽）」が書いてある。太陽は円盤状で上に宮殿が乗っている。これらにはそれぞれ簡単な説明が付してある。つまり、この図は人間世界が須弥山宇宙の南面の閻浮提（胆部州）の一部であることを示しているのである。下部三分の一では、地震、海潮、寒暖、雷鳴等について正法念経等に基づいて説明している。またここには閻浮提の南端にある海や島、地下にある地獄等が書かれている。

左隅には「大海辺際ハ巨艦トイエドモ至ルベカラザル現証」という面白い文が載っている。この世界が須弥山世界のごく一部であるなら当然平面であって、地球説とは矛盾する。上人はこの矛盾を説明す

るため、元禄の頃、新井白石が長崎でオランダ人から聞いたという話を紹介して世界一周が不可能であると説いているのである。いわく。

『かつてオランダの国王が世界の際眼を極めんとして四方に巨船を派した。しかし、東に進んだものは泥海に突っ込んで動けなくなり、あわてていると急に大波が打ち奇せて元に吹きもどされてしまった。南へ行ったものは激浪に翻弄されて進むことができで、望遠鏡でみると前方に巨大な瀑布が見えたのもどつてきた。西へ行ったものは暗闇の中で海面のくもの網のようなものに引っ掛かり、刀で切つてやると逃げかえった。北方では広大な陸地に行きあたったので開拓者を残して一旦引き返し、再び行ってみたら全員が死に絶えていた。このようにして一つも成功しなかった。これらの経験は正法念経等に説かれていることと符合する。もつて西洋人が世界を一周したというのは誤りであると知るべきである。』

この説明は現代人から見るとナンセンスであろう。新井白石は長崎へ行ったことがない。しかし、宝永六年將軍家宣の命で、国禁をおかして潜入して捕らえられたイタリア人宣教師シドッチを尋問し、そこで得られた知識をもとに「西洋紀聞」を著している。この本はキリスト教や世界地理の解説書で、世界は鶏卵のように球形であると書き、マゼランの世界周航についても記載している。ただ、本書はキリスト教にふれているため明治になるまで公表されなかった。そこでその事蹟が誤り伝えられ、このように伝説を産んだのであろう。なにか原典があるのかも知れないが未詳である。

おそらく、在統上人はこの図で現実の世界を書こうとしたのではなく、宗教的世界観の一部として人間界の地図を描こうとしたのであろう。そうした場合、たとえ観念の上だけでも全体の構成に矛盾があつてはならなかった。だからこうした説明を付し、アメリカ大陸もあえて無視したのではなからうか。

こういう観念的な理屈っぽさは滝沢馬琴の小説等にも見られ、江戸時代のインテリの特徴である。二十七歳の上人の気負いとも伺われる。

なお蛇足ではあるが、この世界地図で筆者の興味をひいたのは樺太(サハリン)がはっきり島として描かれていたことである。島と大陸の間には「混同江」と書いてある。当時、樺太北部の地形は明らかではなく、中国やヨーロッパの地理学者は樺太はアジア大陸につきでた半島であると思ったり樺太とサハリンを別のものとしたりしていた。林子平もその著「三国通覧図説」で半島説を採っているという。ただ、日本では島説も有力だったようである。間宮林蔵が樺太北部を探検し、間宮海峡を発見して樺太が島であることを確認したのは、奇しくも本図が書かれた文化五年のことであった。文化七年(一八一〇)幕府が公刊した「新訂万国全図」では、林蔵の報告に従い樺太を正確に島として描いている。ただ、国際的にはその事実は幕府の極秘事項とされ、後年シーボルトが日本地図をひそかに持ち出して世界に発表するまで世に知られなかった筈である。本図がどういいう根拠で描かれたのか興味が持たれるところである。ちなみに、間宮林蔵の墓は当寺の近く日蓮宗本立院にある。

世界大相図、天竺輿地図の内容

二番目にかかれた「世界大相図」はいわゆる須弥山図である。中央に風輪、水輪、金輪にとりかこまれ、七層の山脈の上に聳えた巨大な須弥山(妙高山)が描かれている。頂上には喜見城と善法堂が、その下には四天王の住する四王天がある。須弥山の裾の四方に四つの大州がありそれぞれ二中州が付属している。その一つ南閼浮提に人間世界がある。閼浮提には猫牛州と勝猫牛州が付属している。須弥山の

回りを日輪と月がめぐる。須弥山宇宙は一つではなく他にも無数にあり、その一つが図の右上にちらりとのぞいている。須弥山の上には六欲天と色界の四禪が、さらにその上に無色界が存在する。地下には八大地獄がある。これらについては、それぞれ説明文が付されている。本図は序文に書かれているように縮尺を無視し、須弥山を大きくして縦長の構図で描かれており、それが力強さを感じさせ、本図の特徴となっている。

下三分の一には前述の序文が書かれている。図の左上には宇宙の歴史について「成住壞空」の四劫があることを詳細に説いている。その大略は次のとおりである。

『この世界の終わりに火水風の三災が起こってすべてを破壊し、ただ虚空のみがのこる空劫となる。空劫が二十小劫続いたのち成劫となる。大梵王宮から始まり須弥山世界が逐次生成し生物が生まれて住劫となる。住劫の始めは人の寿命は無限で天人のような生活をしているが、次第に万物が生じると人も変化して寿命が短くなり、貧富の差や犯罪、兵火も生ずる。そしてすべてが壊滅する壞劫を迎える。そして再び空劫となり四劫が順次繰り返されて悠久の循環がつづく。』

この三幅対は「天竺輿地図」でおわる。天竺図（インド地図）は古くから描かれ、「和漢三才図説」にも簡単なものが載っているが、仏典や「西域記」にもとづく閻浮提図としての天竺図も古くからつくられていた。存統上人に一世紀先立つ鳳潭上人の「南胆部州万国掌葉之図」（宝永七年・一七一〇）はややり經典の記載と西欧伝来の知識を組み合わせて描かれものだという。

存統上人のそれは極めて詳細で、各種の經典にある地名がびっしりと書き込まれ細かな解説がついている。上人はこの図の作成にもっとも力を尽くされたのではないかと思われる。図の右下にはいわば総

論の形で「天竺」の語源等を解説している。たとえば『インドを唐では「月」というが、これは歴代聖賢が世を治めるのを月が照らすのにたとえたのだという。』と書いてある。また、『三藏法師がインドに仏典を尋ね、その紀行が「西域紀」に書かれているが、数巻の書物は子供らには読めない。図にあらわせば一目瞭然である。』と発刊の意図を書いている。「掌果図」は参考にならないとも書いてある。

この図を現在のインド地図と対比しても無意味であろう。ここでも存統上人は現実のインド旅行の案内図を書いたのではなく、いわば心の内で仏国土をお遍路している気持ちでこの図を描かれたのであると思われる。この図の最後は「国家治乱在三人之心行」の文章で締めくくられている。

すなわち、『如来は三宝の大導師であるから諸天鬼神も仏勅を奉じて国土を守護している。しかし悲しいかな修羅惡竜も世界を覆滅せんとしている。人が不忠不孝で仁義を失い三宝を敬わなければ、惡竜が威勢を増し災害がおこる。人が忠孝で仏法僧の三宝を敬えば善神の威徳が増し、風雨は時を以てし、災勵は起こらず、国は豊かに民は安らうのである。』と説かれている。

大相図の意義

大相図が作成された文化文政期は大御所家齊の時代である。馬琴、北斎、南北等、江戸文化が世紀末的爛熟の華を咲かせた時代であった。杉田玄白、平賀源内、司馬江漢の活動に見られるように、町人文化の土台の上に蘭学といわれた西欧の学問も次第に浸透していた。宇宙論の分野でも、司馬江漢は文化五年「刻白爾天文図解」を発表してコペルニクスの地動説を解説している。一方、ロシア、イギリス、アメリカ等、新しく通商を求める外国の動きも活発になり、それは林子平の「海国兵談」に代表される

ような危機感、精神的緊張を生み出した。子平を彈圧した榮翁松定定信（その墓所は靈巖寺）も海防には意をそそいだと言われる。

こうした外国文化による刺激は従来の文明にも革新の機運を呼び覚ます。京都積善院の僧、無外子、釈円通が大相図の序文で紹介されている「仏国曆象編」五巻を發表したのは文化七年（一八一〇）のことであった。「仏国曆象編」は西欧文明に対抗し、仏教的世界観の優秀性を鼓吹したものである。円通上人は言う。「西欧の天文曆法によれば須弥山は存在しえないという。もしそうならば四王天も存在しえないし、如来の存在すら否定されることになる。それは仏教の危機である。」このような観点から上人は三十年の研究の成果を「仏国曆象編」およびそれに続く「須弥山儀銘並序和解」「実験須弥界説」に結集し、仏教的世界観の統一普及を図った。それは大きな反響を呼び、その影響を受けた明治時代の怪僧、佐田介石は円通の説をもとにしてゼンマイ仕掛けの須弥山宇宙の模型「視実等象儀」を製作させて明治十年の内国博覧会に出品したという。しかしこれはあまりにも教条主義的な受けとめ方であった。仏教の世界観がいかに精微であっても、それをそのまま現実の天文地理にあてはめることが不可能なのは明らかである。「視実等象儀」は世人の失笑をかったにすぎなかったという。

存統上人の大相図もまた、同じ時代背景のもとで、西欧文明の刺激を受け、それに対抗する意図をもって作成されたものであろう。しかし、大相図序文に書かれているように、存統上人が選ばれた道は円通上人の道とは違っていたものであったと思われる。存統上人の他のお作も知らない私の推論ではあるが、上人は仏教の宇宙論をあくまでも宗教上の、信仰の問題としてとらえていたものと思う。そして仏教は決して現世利益や個人の幸福を願うだけのものではなく、もっと奥深く宇宙の真理とかかわりあっ

たものであることを説こうとしてこの図を描かれたのではなからうか。そう受け取ることに大相図の意義があると思うのである。

宗教は科学とは異なった次元に位置する全人格的問題である。宗教の教典の字句を機械的に現実にあてはめようとする教条主義や、宗教を現世的な利絶を生み出す武器であると考える愚をおかしさえしなければ科学と宗教は対立せず、科学の発達で宗教をおびやかすおそれはない。真の科学者は、科学とは所詮、釈尊の手の平から飛び出すことができなかった孫悟空と同じ存在であることを知っている。存続上人もそれをご存じだったのだろう。

大相図は閻浮提図—人間世界図ではじまり、須弥山—宇宙図へと拡大する。そして再び、釈迦如来の聖地である天竺の図へと収斂し、国家治乱在人之心行の文で終わる。この構成をみると、先の推論に間違いはないと思う。大相図は内憂外患の近いことを思わせる世相の中で、仏教者はなにおなすべきかを真剣に考究された人の所産である。それは無尽世界と人間との関係を考えさせるための一つのマンガ、仏画であると思うのである。

付記：大相図三幅対の複製は余部がありますので、興味をお持ちの方はお申しつけ下さればお送りします。

〒一三五 東京都江東区三好一—三—三 円通寺 後藤真康宛

電話（〇三）六四一—七五一八

にこにこ法話

[4]

ミーちゃんの問題

はせがわ
長谷川 岱潤

(東京・品川区戒法寺住職)



夏休みも、もうあとわずかとなった暑い日のことです。

「ミーちゃん、宿題もう終わったの?」

お母さんが言いたへない言葉を無理に吐き出すように言いました。

「まだだけど」

「早く終わらせちゃいなさいよ。そんなことだと、今年もお誕生日会、延期になるわよ」

ミーちゃんのお誕生日は八月三十日なので、去年も一昨年も、当日はそれどころじゃなくて、九月にはいつてからしていました。

「今年も九月にはいつてからでいいわよ。八

月の三十日なんて誰も来てくれないもん」

「ミーちゃん、みんなも自分と同じだと思っ
ていたら大きな間違いよ」

「そんなことないと思うけどなあ、みんなだ
って同じだよ。夏休みが当分続けばいいのに
なあ」

ミーちゃんはブツブツ言いながら、机に向
かいました。

「あ、あ、先ず国語、読書感想文か、私作文
書くの大嫌いなんだよなあ」

まだミーちゃんはブツブツ言っていました。

「ミーちゃん、カヨちゃんから電話よ」

お母さんの呼ぶ声に、ミーちゃんは救われる思いがして、受話器のところにとんできました。

「もしもしカヨ、どうしたの」

「ミーちゃん、今ユミちゃんも来てるんだ。

いっしょにプール行かない？」

「わあ、行く行く、待ってて、今そっち行くね」

ミーちゃんは自分の部屋に戻ると、今までとは別人のごとく素早い動作でしたくをして、お母さんに言いました。

「あのね、カヨちゃんと、ユミちゃんがいっしょにプールに行こうって誘ってくれたの、ねえ行っっていいでしょ」

「あなたがそこまでしたくしてるんじゃ、もう駄目なんて言えないじゃない。気をつけて行くのよ、浮かれて道路に飛び出すんじゃないよ」

「わかってる。じゃ、行ってきまーす」

ミーちゃんはプールが大好きです。そして宿題という重圧に暗く沈んでいたミーちゃんにとっては、正に青天のへきれき、棚からぼたもちの喜びようでした。

うきうきしてカヨちゃんの家に行っていたミーちゃんに、ふっと不安が起りました。

ミーちゃんは今年、お父さんが忙しくて海に行けなかったのです。

『カヨちゃんたち、真っ黒に焼けているだらうなあ。私こんなに白くて恥かしいなあ』
そんなことを思ったら、急に足取りが重くなってしまう。

「御免ください。カヨちゃんいますか」

「ミーちゃん、早かったねえ、それじゃ早速行こう」

カヨちゃんは待ちかねていたようにそう言う、そのまま玄関から靴を履いて出るこ

にしました。

「行つてきまゝす」

三人は声を揃えて、にこにこしながら叫びました。

「カヨちゃん、今年海行つた？」

道すがらミーちゃんがポツリと聞きました。

「モチ、今年は良かったよ。ミーちゃんは」

「ユミちゃんは、行つたの」

カヨちゃんの間には答えずに、ユミちゃんに聞きました。

「うん、ちょっとだけだけどね」

「そう、二人とも行つたんだ。いいなあ、私今年はいけなかつたんだ。だからさあ、ほら、こんな白いんだよ、恥かしいなあ」

「そんな恥かしがるほど白くないじゃない」
ユミちゃんが自分の腕を並べながら言いました。

「白いよ、いつもの牛だったら、私真っ黒だ

よ。ユミちゃんは色白なんだよ」

「ミーちゃん、海に行かなくなつて、妹のチーちゃんとしょっちゅうプールに行つてたんでしょ。充分焼けているじゃない」

カヨちゃんにまで追討ちみかけられ、ミーちゃんはおもしろくありません。

「東京の光線じゃ、焼けませんよ」

ミーちゃんはひがみつぽく言いました。

三人はブツブツ言いあいながらプールに着くと、早速水に飛び込みました。

「気持ちいいねえ、宿題のことなんかすっかり忘れられるわ」

「やだ、変なこと思い出させないでよ、忘れてたのに」

三人は笑い転げながら泳ぎ回っていました。

「あ、あそこのフェンスの向うからこつちを見てるの徹君じゃない」

突然カヨちゃんが叫びました。

「あ、ほんとだ、徹君よ」

ユミちゃんもそお言うとしり振りました。

ミーちゃんはプールから上がって、徹君のほうへ駆けて行きました。

「徹君も、いっしょにプールにはいりましようよ」

徹君はミーちゃんの言葉に背を向けると、さーと駆けていってしまいました。

「変な人ね、気にしないで泳ぎましょ」

カヨちゃんはそう言うとき、ターンをして泳ぎ始めました。

三人が泳ぎ疲れてプールを出たのは、もう夕方近くになっていました。

ミーちゃんは二人とわかれてから、さっきの徹君のことが気になっていました。

『徹君どうしたんだろ。顔色が何か悪く感じたけど、どこか身体悪いのかしら』

ミーちゃんはもういても立ってもいられま

せん。

『よし、徹君の家に行こう』

そう決意すると、ミーちゃんは徹君の家に向かいました。

「御免ください。徹君いますか」

「徹は、今寝ているの」

徹君のお母さんのその言葉に、びっくりしてミーちゃんは、訪ねました。

「徹君、何処が悪いの？」

「徹はね、小さいときから汗が出ない病気なの。だから夏はとっても怖い季節でね、激しい運動は絶対できないの。早く夏が終わってくれないかねえって、いつも話しているんですよ」

「全然知りませんでした。さっき徹君に悪いこと言っちゃいました。起きたらごめんなさいって謝っていったって言ってください。それじゃ、お大事に」

ミーちゃんはとても自分が恥かしい気持ちになりました。自分のことばかり考えて、人のことは何一つ理解しようとしなかった自分が、情けなく思えてきました。

『人から見れば、何倍も楽しんでゐるのに、文句ばかり言つて、ミーってほんとに我がままなんだなあ』

夜食事が終わつてから、ミーちゃんはお父さんのところに行つて聞きました。

「お父さん、国語の宿題で読書感想文があるんだけど、何かいい本教えてくれない。ただし、長いのと難しいのはだめよ」

「そうだなあ、これなんか面白いよ」

お父さんはそういうと、フランスのノーベル賞作家アナトール・フランスの短編集を持ってきました。

ミーちゃんは今朝までとは違います。一所懸命読み始めました。すると、作者が中学時

代に担任の先生から聞いたという寓話『エビキユロスの園』という話がありました。その話はミーちゃんに強い衝撃を与えました。

——ある妖精が、一人の子供に一つの糸まりを与えて言う。この糸はお前の一生の日々の糸だ、これを捕るがいい。時間がお前のために流れてほしいと思うときには、糸を引っ張るのだ。糸まりを早く手繰るか長くかかつて手繰るかによつて、お前の一生の日々が急速にも緩慢にも過ぎて行くだろう。糸に手を触れない限り、お前は生涯の同じ時刻に留まっているだろう。その子供は、糸を手にした。先ず大人になるために、そして愛する婚約者と結婚するために、それから子供たちが大きくなるのを見たり、職や利得や名誉を手に入れたり、心配事から早く開放されたり、悲しみや年とともにやってきた病気を避けたり、そして最後は悲しいかな厄介な老年に止めて

刺すために、糸を引っ張った。その結果子供は妖精の訪れを受けて以来、四か月と六日しか生きていなかった――。

ミーちゃんは考え込んでしまいました。その子はどうしてそんなにも早く糸を引っばちやっただろう。私は夏がずっと続けばいいと思っているし、徹君は早く終わってくれないかと思って祈ってる。私たちに、もしそんな糸が手に入ったら、その糸をどう引っ張るべきなんだろう。

「お父さん、そんな糸まりをみんなが持つてたら、世の中めっちゃくちゃになっちゃうね」「どうして」

「だってさ、私は夏が来たら止めちゃうし、徹君は夏が来たら引っばっちゃうんだよ。私徹君と会えなくなっちゃうよ」

「それは困ったねえ、楽しい時間は一時でも長く、辛い時間は一時でも短くというのが、

人間の自然の心理だけど、でもそれが楽しくなかったらもつと悲劇だねえ」

「ほんと、どうしたらいいの」

「お父さんはそんな人間の気儘な感情のままに糸を引っばったら、少年と同じ愚かさを繰り返すことになると思うんだ。糸まりは何があっても時間の流れる速度と同じ早さでつねに引っ張ることが一番いいと思うんだ」

「そんなの面白くないな。それに病気のときなんか早く引っ張りたいよ」

「面白くなくなつて、辛くたつて、そうしようと思う勇気が必要なんだ。短い病気ならまだしも、永い病気や不治の病の人はどうなるんだ。糸を時間の速度で引く力、それが宗教だとお父さんは考えてるよ」

「ハ―イ、わかりました。宿題にそう書いておこう、出来た出来た」

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(3)—

木の
下
隆
一

豊中で過ごしたのは、昭和十四年の一月(一年生の三学期)から、十五年の七月(三年生の一学期終了)までの約一年半という短い期間だったが、いま思っても惨憺たるものであった。病氣ばかりしていた。無欠席で満足に学校へ通えたのは三か月あっただろうか。従って友達も出来ず、孤独な毎日であった。神経症が再発しなかったのが不思議なくらいである。そんな私の慰めにも思ったのか、父はどこからか子猫を貰って来た。私は子犬の方がよかったのだが、家が当時流行の文化住宅というやつで庭が狭く、おまけに日当たりが悪かった。犬は飼えなかった。

猫という動物を身近に置くのは初体験だったし、生後二か月ほどの子猫は、子犬のクロ

ベエを初めて抱いた時よりもっと頼りなげで、扱いにはかなり気を遣った。金目銀目の雄の三毛猫で、目の色が違っている猫というのも珍しいが、雄の三毛というのは非常に珍しい、愛猫家なら喉から手が出るほどの珍種だということだった。そんな珍しい猫がどうして我が家に迷い込んだのか、その訳を私は知らない。確かに父が貰って来たのであるが、迷い込んだとしか言い様がなかった。こういう言い方が適當かどうか分らないが、珍種ということは劣性遺伝子の相乗作用の現れだったのか、とにかく体の弱い猫であった。始終腹をこわしてあたりかまわずたれ流すので、母はその始末にほとほと手を焼いていた。奇妙なことにこの猫、私が病臥している時は元気で、私が快方に向かうと入れ替るように病氣になった。持てあまして、結局この猫は半年ほどで元の飼い主に返してしまつたが、時々母は思い出したように「可愛い顔した上品な猫だった」と言うことはあつても、余程懲りたのか二度と猫を飼おうとは言わなかった。

昭和十五年八月、父が上海の国策会社に出向することになって、私は母の故郷である愛媛県の松山市に歸った。戸籍上は本籍地の愛媛県西条市で出生したことになるが、私が生まれたのは、この松山の祖父の家だったのである。月足らずで生まれた私は、祖母の肌の温みを吸って生きたと後で何度か聞かされたが、それはともかくとして、私にとつては最初に訪れた転機であつた。

近所に、かつて大病院の婦長をしていたという小母さんが住んでいた。この小母さんと出会わなかったら、恐らく今の私はなかったに違いない。ひよろひよろした私を見て、小

母さんは母に言った。

「小児結核だね、この子。十まで生きられればいいが……」

当時は今と違って年齢は数え年で言っていたから、私は九歳になっていた。だから後一年の命と宣告されたようなものであった。結核が不治の病いとして恐れられていた頃の話である。豊中で診てもらっていた老医にも、うすうす母はそれらしいことを言われていたらしいが、母にはまさかという気があったようだ。しかし十までと具体的な数字を挙げられると、愕然とせざるを得なかった。

「どうすればいいんでしょ」

「そうねえ……」

小母さんは私の腕を掴んで、値踏みするような目をして宙を睨んでいたが、
「それにしても細いねえ」

と言った。

「お祖父ちゃんは骨皮筋衛門って呼ぶよ」

と私が言うと、小母さんは苦笑した。まさしくその通りだったからである。小学校三年にして、私は四貫五百匁（十七キログラム足らず）しかなかったのである。小母さんはなおしばらく宙を睨んでいたが、断を下すように言った。

「先ずカルシウムと、結核に効く薬を注射して、体質を変えるしかないねえ」

薬をも掴む思いというか、注射は早速その日から始められた。隔日に打たれた注射液の

名前は覚えていないが、結核に効くといわれた薬は油性で吸収が遅く、痛みは翌日まで尾を引いた。生を享けて最初の試練だったと言ってもいいだろう。その後この試練は一年近く続いて、タイムリミットの十も注射のおかげか、無事通過することが出来たのであった。

昭和十六年四月、小学校は国民学校と改称され、体力検定が始った。そして十二月八日太平洋戦争が勃発し、国家的には肇国以来初の激動の時代を迎えたのであるが、毎月八日を大詔奉戴日と称して、早朝裸足で神社参拝をさせられるのを重荷に感じたくらいで、子供の世界はそれほど大きな変化はなかった。あらゆる物資が統制され、暮らしは不自由になったが、それは大人が心配すること、子供たちは「欲シガリマセン、勝ツマデハ」の心境で、当然と受け止めていた。ただラジオのニュースで「海行かば」が流され、「……二階級特進シ、上聞ニ達セラレタリ」といった風の将兵の計報が伝えられることが多くなるにつれて、子供心にもチラッと不安がよぎったことは否めない。不安と言えば、私自身十九年三月には中学校受験が控えていた。前年の秋口から、進学について教師と父兄の面談が持たれており、母が松山中学受験を希望したのに対し、教師は新設の私立中学の受験を勧めていたのである。幼年学校や陸士・海兵の予備校みたいな県中（県下に県立中学に何校もあったが、その第一の中学という意味で、一般的にそう呼ばれていた）のスパルタ教育について行ける体力が無い、というのがその理由だった。注射によって体質が改善されたと言っても、同年代の子供と比較すると、私の体格は格段に劣っているのは事実だった。私の周囲

でも松山中学受験に関しては賛否両論相半ばしていたが、「お前が受けたい所を受けなければいいんだ」と祖父に言われて、私は松山中学を選んだ。大人の心配をよそに、なんとかなさりと一番楽観的だったのは私自身だったかもしれない。それでも一沫の不安はあった。教師が果たして内申書を書いてくれるかどうか――。保証は出来ないと言いながら、教師は松山中学宛の内申書を書いてくれた。よし、この先生のためにも合格しなければ、そして合格したら幼年学校を受けてやろうと思った。この年から幼年学校の募集要項が変わり、一年繰り上がって、中学一年生から試験が可能になっていた。下級将校の育成に軍部はやっきになっていたのである。

試験は体育偏重とも言える選抜方法だった。一つでも失敗すれば、先ず絶望であった。私が一番懸念していた跳び箱は尻を引っ掛けながらもなんとか跳べたし、投擲は棍棒を投げさせられたが、これは思いの他よく飛んだ。筆記試験はなく、学科試験はすべて口頭質問だった。四、五名の試験官から矢継ぎ早に質問を浴びせられるのは初めての経験で面食らったが、それもどうか破綻なく答えることが出来たから、後は身体検査の結果待ちという事になった。そして合格したのか分からないが、六月に実施された陸軍幼年学校の受験を許されたから、そう悪い成績ではなかったと思う。これが私にとって第二の試験だったが、幼年学校の方は、最初の身体検査で胸囲が足りず、あっさり落とされてしまった。胸囲が足りないという理由だけで落とされたのが口悔しかった。試験会場だった松山商業から、どこをどう歩いて家まで帰って来たのか、全く覚えていない。

泣くまいと思っても、涙がボロボロこぼれて仕方なかった。初めての挫折だった。

二十年七月二十六日、B 29 六十機の夜襲で松山の旧市内は殆ど焼失し我が家も烏有に帰したが、これは敵愾心を煽る効果しかなかった。二度目の挫折感を味わったのは、八月十五日、「終戦の詔勅」の放送を聞いた直後であった。戦争に負けたことより、九月に行われる予定になっていた滑空訓練が中止になるのではという危惧だった。そしてなぜか絶望的になって、河原の中洲の草いぎれの中で私は声をあげて泣いた。もう二度と自ら操縦して大空を翔ぶことはないだろうという思いが私を泣かしたのであった。

この項では犬が一切登場しないことを訝る方もあろうかと思うが、この時代の私の記憶の中に、一匹の犬も存在していないのである。豊中時代は病気がちで出歩くことが少なかったからという理由もつくが、松山時代の記憶の中に犬がいなかったというのは、実は私自身解せないのである。ただ推測出来るのは狸を祀る土地柄だったから、狸に害をなす犬を飼わない慣習が古くからあったとも考えられるし、犬神という正体不明のものを嫌う土地柄でもあったから、そんな俗信が入り交って犬を敬遠する結果になったのかもしれない。

誰も明らかに言わないが、犬神憑きとか犬神の血筋と囁かれている家があった。実態は誰も分からないまま、そう信じられているのである。お気の毒なことである。犬神を辞典で見ると、俗信で人に害をなす眼に見えない小動物と出ている。これを私は恐犬病の病菌だと見ている。何時の頃か分からないが、古書にそれらしい記述があれば、私の疑問は立ち所に氷解するのだが……。

立ち止まるな善導

〈50〉

|| 最終回 ||

寺内大吉

挿絵・松濤 連文

弥陀の化身

十三

「善導和上はご自身を煩惱にみちた下品下生の凡夫と考えておられたようです」

ある日、神和原を訪れて善導の墓葬地を拝したあと浄業は少年憚良にむかい語りはじめ

た。

「あの和上が下品下生の凡夫なのですか。そうすると私どもは何なのでしょうか」

「浄土願生者は日常におのれをそのようにきびしく見つめるものです。その心がけがなければ正しい往生は遂げられないでしょう。先日来、わたしは和上の言葉を、御遺文と照合して考えてみました。還相回向の思想です



が、御自身を上品上生の往生者とするのは、いかにも善導和上にふさわしくない。下生の凡夫が上品往生を願う」

と浄業は善導の黒衣の袂から経文の抜き書きを取り出した。遺文に接するや浄業なりの検証を加えたにちがいない。

——上品下生者、亦信因果、不謗

大乘、但発無上道心、以此功德

廻向願求生極樂國。

「観無量寿經の散善義で、上生上品から下品下生へ至る九品を通じて三心を説いている局面です。その上品下生者とは、因果を信じて大乘を誹謗せず、無上道心をおこしてこの功德で極樂に生ぜんことを願う行者を言う。ここで無上道心だが、善導和上はその四帖疏（観經疏）でこう書いていらっしやる」

その箇処を指示した。

——唯發一念厭苦樂、生仏境界

速滿菩薩大悲願行、還入生死

普度衆生、故名發菩提心也。

ただ一念をおこして苦を厭い、諸仏の境界に生じて、速かに菩薩の大悲願の行を満たし、還って生死の（境涯）に入り、あまねく衆生を救わん（度せん）ことを願う。

つまり下凡下生の身ではあるが、生前に善業を積み、その命終時には念仏を積んだ功によって阿弥陀仏や諸菩薩の來迎を得て、金蓮の台上に乗じて極樂淨土へ往生する。しかも彼の地へ到ってもなほ精進を怠らず菩薩の行を成満し、再びこの穢土へ還り來たつて（還來穢國）迷える衆生を救いたい（度人天）と下生凡夫の志を善導はその死に臨んで強く希求したというのである。

「わたしは弥陀仏身の光りを感じ、長安の街からまっすぐにこの神和原へやってきたのは、すでに善導和上のお身体に上品往生の光

輝が満ちあふれていたからなのです。ご自身は下生の凡夫とおっしゃっているのです、それを否定するわけにはまいらないが、上品下生の者でも充分に還相回向が可能であることを身を以てお示しになったのではないでしようか」

浄業はこの数日間における疑念を一気に解明できた思いで少年語良に師の往生相を懇切に語るのであった。

「それで、私どもは善導和上の傍らで暮しながら何をしたらよろしいのでしょうか」

「観経が説く三心のうち、とくに廻向発願心を忘れずに御供養申上げることです。同じ四帖疏で和上は明言されている。いま二尊、釈尊と弥陀仏の心に信順して水火の二河を顧みず……」

浄業の語気はいちだんと強まった。四帖疏の文章は続く。

——いま二尊の心に信順して水火の二行

を顧みず、念々に忘るることなく、かの願力の道に乗じ、命を捨てて以後、かの国に生ずることを得て、仏とあい見えんに慶びはなんぞ極まらんとくに喩う。また一切の行者、行往坐臥の三業に修するところ、晝夜時節を問うことなく、常にこの解をなし、常にこの想いを作(な)せ。故に廻向発願心と名づく。廻向とは、かの国に生じおわり、還って大悲をおこし、生死に廻入し衆生教化するをまた廻向と名づくるなり。

すでに善導は二河白道を力説し、西方浄土を目ざす願生者が「白道四、五寸」という狭い一本の道をひたむきに走る姿を活写する。「須臾にして西岸に到り、善友のあい見て喜ぶというは、即ち衆生は久しく生死に沈んで曠劫に論廻し、颠倒自纏して解脱するに由なく、仰いで釈迦の発遣して西方に指向せしむ

ることを蒙り、また弥陀の悲心をもつて招喚し給う」と「往相」のきびしさを描く。しかし、この往相もやがて還つて衆生の教化する廻向心がなければ大乘の化他ではないとも言いきる。つまり二河白道思想の基底はおのれ一身の救いではなく、他を救う菩提心に支えられていたのである。

善導が長安の街角に立ち、道ゆく人々に書写した「阿弥陀経」を配布したのもこれら凡夫に上品下生の往生を願わせた心づもりだったにちがいない。おのれ一身だけではなく、下生の者でも上品往生を遂げて還来穢国、度人天の菩薩道への門を開いてやりたかったのである。

善導のこんな教示が受容されたものかどうか。七世紀末あたりから中国の念仏信者たちは、ことに在家者は臨終において病者の生前の功を讀める様式を採択するようになった。親戚縁者が枕もとに集り、病者に意識がある間、つとめて彼ないし彼女の生前の功績を語

りかけ、その生涯を讃嘆するのである。これは病者の気分を高揚させる効果もあるが、同時に上品往生へ導こうとするねらいがあったと思われる。明るい雰囲気の中で称名念仏の合唱がくり返され病者は歡喜のうちに西方の旅へ登る。

「いま善導和上の教えを受けた各地の念仏者たちに呼びかけているところです。みんなの力でこの地に墓塔を造立しようと思う。それまではしっかりと此処のお守りを頼みますぞ」

浄業は神和原を去るとき、いつも同じ言葉をくり返した。憚良の答えも同じであった。しっかりと計画を立てて立派なものを立てて欲しい、である。

このあと浄業が、現存する十三層の墓塔を建立したことは前に触れた。そして自身もその傍らを終息の地にえらんでいる。

それらの造立が開始されるまで憚良は、亡き突厥人の妻とその子ともども朝夕、埋葬地

へ新鮮な花々を植えては供養に専念した。

その花々を憚良たちは終南山の山麓に求めた。季節は春から夏へかけてである。百花が咲き乱れていた。

埋葬地の赤い地肌は見見る多彩な色で染められていった。花々が増えるにつれて、各地から来訪する念仏者たちも多くなった。ようやく聖者善導の示寂が伝えられていったのである。

憚良たちはその応待に追われた。善導臨終の詳細を語らねばならなかった。

訪問者のなかにその日、仰々しい隊列がくりこんでくるのを憚良は眼にした。十数騎の官兵に囲こまれた車駕が花園へ横づけになった。降り立ったのは則天武后であった。

十四

伯母の則天武后は終南山の含風殿に滞留し

ていた。そこで善導の死を知り、墓葬地が神和原であることも聞きこんだ。長安城へ戻る途次、墓参に立ち寄ったのだという。

「ずっと此処でお守りをしているんですか」

武后はすっかり僧らしくなった髯をじろじろ眺めまわしている。

「和上をお守りする日々が大切な教えをよみがえらせてくれます」

「その大切な教えとは何ですか」

「廻向心です」

「死んだ人間がよみがえって救いの手をさしのべるといいますか。それも取るに足らない下賤な凡夫がですか。かりにそんな救われたをして区々たる一個人の悩みでしよう」

武后は高飛車に論戦を挑んでくる。何か確信があるようである。

「一個人の悩みのほかに人間の悩みが存在するのでしょうか」

武后は微笑んだ。すでに六十歳に届いた伯

母だがその顔からは微塵も老いが感じられない。
い。

「憚良や、妾は人民のすべてを救わねばならない立場にあるのだよ」

「……………」

「阿弥陀さまよりも弥勒さまです」

「弥勒菩薩——」

「大雲經によれば仏滅七百年を経て弥勒菩薩が浄光天女という女身に姿をかりて地上へ現れるそうですよ」

「弥勒さまが女身になってですか」

それがどうしたんです、とまぜっかえしたかったが憚良は言葉にしなかった。

「その浄光天女が妾らしい」

「誰がそんなことを？」

「白馬寺の高僧たちがそう言い合っているそうです」

またしてもこの伯母に採り入ろうとする連中がのさばりはじめたのか、と憚良は悲しんだ。つい先ごろまでは偃師の明宗儼が符呪幻

術で武后を籠落していたではないか。

この時点では未だ則天武后の弥勒下生は現実化していないが、二年を経た弘道元年（六八三）十二月、唐高宗が貞観殿で崩すると俄然活発となる。

発端は洛陽の僧法明ら九人が「大雲經」の經句を引用した嘆願書を廟堂へ提出したことによる。その經文で「仏陀は浄光天女に告げて曰く。わが没後七百年を経て誕生した汝は王位を継承せよ。天下は威伏し、四方諸国みな来たり承奉す、と」書かれた事実を則天武后にあてはめたのである。仏滅後七百年で世に出た天后は彼女しかない。しかも今、夫高宗に死なれた。王位を継承し、浄光天女の本性である弥勒菩薩の化身を世に顕現させて欲しいという嘆願であった。

この「大雲經」。そもそも偽經であって、則天武后のために薛懷義が造作したものである。

——懷義は郢(こ)の人、本性は馮(ふう)、名は小宝、薬を洛陽の市に売る。千金公女(高宗の女)に因りて以て進み、幸を太后(武后)に得たり。禁中に出入せしめんと欲し、乃ち度して僧となり懷義と名づく。(資治通鑑)

前身は薬売りの偽坊主であった。これが向馬寺の僧らと結託し「大雲経」を偽作し、則天武后に採り入ったのである。

武后が皇帝へ榮進すると懷義はその側近として権力をほしいままにした。「唐」を廃して「周」という新国家名まで制定させた。「武周革命」と呼ばれる理由がそこにある。

この間、懷義は各地に大雲経寺を建立させた。新設もあるし旧寺の改称もあった。とにかく政教一体、則天武后の独裁と護国經典「大雲経」の教義で中国全土を支配した。

その「大雲経」が偽経であることはすでに指摘したが、これに限らず護国思想を盛りこ

んだ大乘經典には中国で偽作されたものが多い。

日本の日蓮が「立正安国論」や「守護国家論」その他でしきりと引用する鳩摩羅什訳の「仁王般若波羅蜜經」なども明らかに偽経だと言われる。(望月信亨「仏教經典成立史論」)

例えば大梁皇帝製の注解大品序に「講般若者多説五時一往聴受似有重更研求多不相符。唯仁王般若貝書各部世既以疑經今則置而不論」とある。般若を講ずるものは五時の別で説くが、重さねて研究すると順序が符合しないのみか、仁王般若經は世に疑經と目されているのだから、今はこれを用いないことにする、と言いきっている。

君主がおのれの都合の好いように經典を作製させる。これに應ずる宗教者もだが、君主自身も人民に対して甚だしい偽瞞行為をやっていることになる。

「これからが妾たちの時代ですよ。あんたも

王城へ戻っていらっしやい。やることが沢山あります。若い承嗣や三思たちはよく働いてますよ」

武后は誘った。

「承嗣や三思がですか」

どちらも武後の異腹の兄たちの遺児だった。承嗣の父は元爽、三思はその弟元慶の子である。この兄たちは武後に疑われ僻地へ流され消されている。

「何と言っても身内の者は頼りになります」

その身内の者を次々に殺していった則天武后ではないか。

武承嗣、武三思たちは妖僧懷義の手下になり偽経を造ったり、大雲經寺の建築に駆けずりまわる。さらに重拱四年(六八五)の四月には洛陽郊外の川原で「こんな石を拾いました」と武承嗣が武后のもとへ届け出てきた。

——聖母臨人、永昌帝業

これは武承嗣自身が刻んだもので、則天武后の独裁政權を讃えている。年号は早速永昌にあらためられた。だが間もなくおごった妖僧は武後に嫌われて毆殺され、武承嗣、三思らもこのあと皇太子位をねらって退けられ悶死する破目になった。

憚良にそんな行く末を見とおす明があるわけはなかったが、いま決断しなければこの魔物のような伯母から絶縁する機会はないと思っただ。さらにその決断を不動にさせてくれたのは、男児の手を引いて現れた亡き突厥人泥亀の妻だった。

その泥亀も、またあの吏生王徐明も伯母武后の「生け贄え」になったのではなかったか。

「わたしは出家した身ですから再び王城くは戻りません」

きっぱり断わることが出来た。武后は声をたてて笑った。

「出家した身ですか………尼僧に子供まで生

ませて親子睦まじく暮らしていて」

母子を憚良の愛人と考えている。だいたい年上の女、少年には似つかわしくない男児——そんな不調和が則天武后には理解できなかったらしい。男女は年齢なぞに関係なく情事に燃えるものと信じこんでいる武后だった。

現に彼女は妖僧懷義とも肉体関係を持ったが、その死後は張易之、昌宗という二十歳そこそこの美少年の兄弟を蓄えた。夜ごと兩人を相手に情事にふけた。武后自身が六十五歳から七十の声を聞く老境にであつた。

善導の墓前に敬虔な祈りをささげたあと、車駕へ乗る前、武后はもう一度憚良に説得をこころみた。

「いま笑顔で誘いますが、次は恐ろしい刃が迎えにやってきましたよ」

明らかに脅迫であつた。

「わかっています。二河白道ですからね」

「何ですか、その二河白道って」

「善導和上の教えですよ。河が二つと白い道

が一本です」

「その河と道がどうしたというんですか」

「どうもしません。和上は、いつもこの話をして下さいました。この河を渡って白い道をまっしぐらに進めば廻向発願の岸へたどりつけるんです」

武后には何の話やらさっぱり見当がついていないようだ。落着きはらった甥を異邦人に接するような眼で眺めている。

十五

南に火の河がある。北は深淵に臨み、中間は巾四、五寸ほどの狭隘な白い道である。炎と波浪がこの道を浸たして往く者の足もとを脅かす。炎を避け波シブキをくぐり休むいとまもない。しかも背後からは群賊、悪獣が追ってきており引き戻すことも許されない。

——我れ今廻るとも亦死せん。往する
(止まる)とも亦死せん。去るとも亦
死。一種として死をまぬかれ(勉)ざ
れば我れ寧ろこの道を尋ね前に向っ
て去らん、すでにこの道あり。必ず
まさにわたるべし。(「観經」散善義)

二河白道のきびしい状況を描写している。
善導教学の核心を衝く比喩である。この白道
上をまっしぐらに西へ向って走る浄土願生
者。左右や背後の声に耳を傾ければ、たちま
ち惑乱の渦へ巻きこまれてしまう。

善導はこの二河白道の比喩を説きおわって
「また一切の行者、行往坐臥の三業に修する
ところ、昼夜時節を問うことなく、常にこの
解をなし、常にこの想いをなせ」と結句し、
続いて「故に廻向発願心と名づく。また廻向
というは、かの国に生じおわり、還って大悲
をおこし、生死に廻入し、衆生を教化するを
また廻向と名づく」と強調する。

ニュアンスとして、死を賭して西方浄土を
目ざす願生者は三心のうちでもこの廻向発願
心に最大の力点を置いているように思われ
る。

二河白道が善導教学の核心とすれば、廻向
発願心はその玉糸とも言えるのではあるまい
か。さらに本文の「観無量寿經」では上品上
生の者にしか還相廻向の門が開かれていない
のに、善導はその四帖疏があえて上品下生の
凡夫にも「ただ一念をおこして苦を厭い、諸
仏の境界に生じて速かに菩薩の大悲願行を満
たし、還って生死に入り、あまねく衆生を度
せんことをねがう」と機会を与える。万人の
救済を誓う阿弥陀仏の慈悲を、ただ享受する
だけでではなく、その恩恵を「廻らし」て衆
生救済を念願したのである。善導の念仏思想
の核心と呼ぶゆえんである。

神和原に秋がきた。

浄業や懷憚、懷感ら面受の弟子たちによる
墓塔造立の業が開始された。当然のことなが

ら墓葬地をおおうていた花園もいったん除去して、新たに構想も直さねばならない。

憚良は泥亀の遺児をともなつて朝夕、墓葬地での念仏を怠らなかつた。

この五歳にみたない幼児は玲瓏珠のような心の持主であつた。育つた環境上、それなりの苦勞もしたるうに暗い影なぞ微塵も感じられない。

朝の太陽が昇ると、必ず憚良が起居する草庵の戸口から可憐な声をかけてきた。

「和上さまが、もうお目ざめですよ」

地下の善導が眼をさまし、となえる念仏の声で今日の交信を開始する、という意味である。もちろん憚良自身が教えたことだが、そつくり受容している姿は人間とは思えないものがある。

「お前さんは仏の国からやってきたんじやあないのか」

ある朝、念仏の唱和を終え朝餉をとるべく墓葬地から引きあげてゆく透次、まともに訊

いてみた。

「仏さまがいらっしゃる国つてお花が一杯咲いているところでしょう」

「そうだよ」

「ずっと昔に一度、そんな綺麗なところを見たことがあります」

「やっぱりおぼえてゐるか」

憚良はまじまじと幼児の顔を凝視する。笑くぼをうかべた無心な表情が、仏性そのものを告げているようだ。

還来穢国とは、このことを語っているのではないだろうか。

いったん浄土へ往生を遂げた死者が、菩薩位を得て再び生死の界、この世へ舞い戻ってくる。穢土へ還り来たる。

しかし、それは輪廻転生、旧の姿で蘇生するのではあるまい。欲心で汚れた過去の記憶をすっかり拭ぐい去つて、新生の胎児となつて還来するはずである。玲瓏珠の如き幼児の澄んだ心こそ、菩薩のそれを言いあててい

るではないか。その仏性が、ひたむきに「度人天」を誓願する。一人でも多くの人間を救うために新しい人生のすべてを燃焼し尽すであらう。

このように香ぐわしい人の命をつなぐ清らかな輪こそが、念仏の相統であらう。

則天武后が口走った「恐ろしい刃が迎えに来る」が現実にあられたのは同じ秋の日、夕暮れ時であった。泥亀未亡人が草庵で写経する憚良をあわただしく呼びにきた。

「王后さまのお使いという人が……」

「来たか」

「三人づれです。わたし、街へいって留守と申しておきましたから、このままかくれていて下さい」

未亡人は草庵内を見まわした。適当なかくれ場所を探がす眼だ。

「いや、会いましょう。かくれてもかくれとおせる相手ではない」

黄昏の影が半面をおおう神和原。善導墓碑

地のかたわらに三人の男が立っていた。長安城からやってきた則天武后の使者たちだった。いや、刺客と呼んだ方が適切かもしれない。

「お城へ帰ろう」

一人が憚良の右肩を掴んで言った。

「お供します」

「天后の御命令は絶対だからな」

釈明するような口調になった。それだけでも長安城へたどりつけるのかどうか、疑うてからかねばなるまい。

しかし憚良は覚悟の腹をきめていた。宮廷内の数々の秘密を知悉している自分だからである。

「最後にお願いがございます」

「何だね」

「善導和上にお別れをさせて下さい」

「ゆっくり名残りを惜しむがいい」
快く許してくれた。

憚良は未だ花が咲き乱れている斜面に膝ま

☆☆

真
身



づいた。声高らかに念仏をとなえはじめた。
 こんなに朗々と響く経験は初めてだった。
 地下深い和上の御遺骸へ屈くかとも思われ
 る。

いつまでもやめなかった。止めようとして
 もこの念仏、止まらないのである。

やがて刺客の音が背後で響いた。

「お前のお経、すでに死者の声だね」

「……」

仏の声と言って欲しかった。

「死んだ者を、もう一度殺すこともあるまい
 ……のう、城へ帰ったら、すでに死んでお
 ったと報告したらよいだろう」

仲間に同意を求めている。

憚良は聞く耳をふさいで、さらに声を激し
 くして念仏を続けた。

「未だ子供だ。殺すこともあるまい」

仲間も応じてきた。

二河白道の念仏だ、と自分に言い聞かせな
 がら憚良は声を張り上げる。

三つの長い影が墓葬地から遠ざかってゆ
 く。あたかも二河へまで追いつめた悪獸が、
 炎と波シブキを包まれた白道の奥へ走りこん
 だ行者の追跡を諦らめて岸辺から立ち去る図
 に似ていた。

いつのまにか憚良のかたわらには泥亀未亡
 人と遺児とが坐りこんでいて念仏を唱和して
 いるではないか。

廻向発願心の念仏――

憚良は現実のすべてを忘却し去って念仏を
 となえ続ける。眼前にひろがるのは善導和上
 の瘦せたお姿だけであった。しかもそのお姿
 が阿弥陀仏の「真身」にちがいがなかった。

(完)

「立ち止まるな善導」は五十回の連載をもって、
 ここに最終回を迎えました。寺内先生、松濤先
 生、ご苦労さまでした。

読者諸兄のご感想をお寄せ下さい。

(編集子)

舞見御中署

埼玉工業大学 松川文豪	淑徳中学校長 淑徳高等学校長 里見達人	〒174 東京都板橋区前野町五一四―一 鎮西学園理事長 鎮西高等学校長 真和中・高等学校長 上田祐規 〒862 熊本市九品寺三一―一	東山学園長 石井俊恭 〒606 京都市左京区永観堂町五一
上宮学園 理事長・学園長 鶴飼隆玄 高等学校長 鶴飼光順 〒543 大阪府天王寺区上之宮町三一六	鎌倉大仏殿 高德院 佐藤密雄 〒248 鎌倉市長谷四―二二八	法然上人降誕聖地 美作誕生寺 岡山県久米郡久米南町 電話〇八六七二八―二二〇二	浄土宗宗務総長 大田秀三 〒370 高崎市通町九〇 安国寺 慈光ビル(〇二七三)二三―四〇〇〇
寺内大吉	大原山 西福寺 鶴飼隆玄	萩市 常念寺 住職 古本光然 老隠 古本超然	華陽院住職 堀田良謙 〒420 静岡市鷹匠二―二四―一八

舞見御中

龍泉寺住職 伊東 康雄 〒107 東京都港区南青山二―八―二五	本山光明寺執事長 西念寺住職 北邨 謙順 〒150〇二 南足柄市沼田三一五	回向院住職 本多 清敏 〒130 東京都墨田区両国二―八―一〇	稲田 稔界
おてらはみなさんのそうだんしよ 桜と観音さまのお寺 正念寺・是田寺 浄心寺 小池 政雄	称名寺住職 須藤 隆仙 〒040 函館市船見町一八―一四 電話(〇一三八)二六―五二二五	中島 真哉 青山 梅窓院 〒107 東京都港区南青山二―二六―三八	教安寺住職 野呂 幸進 〒210 川崎市川崎区小川町六―一二 電話(〇四四)二二二―四九四六
〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一 清岸寺 原口 徳正	松庵寺内無為窟主 小川 金英 〒025 花巻市双葉町六―一四 仏教福祉センターによるひる銀行	正覚寺住職 楠美 知行 〒030 青森市本町一―一―一二	サンガ真仏教舎本部会長 大善寺住職 裏辻 賢洲 〒811 福岡県宗像郡福岡町松原区

舞見御中

法然上人二十五霊場 第二番仏生山法然寺 細井俊明	伝通院住職 吉川哲雄 〒112 東京都文京区小石川三一四一六	圓光寺住職 加藤順底 〒020 盛岡市南大通三一三一四九	北川一有 長寿院 〒114 東京都台東区鳥越二一三一八
〒113 東京都文京区本郷一八一三 昌清寺 住職 服部光順 電話(〇三)八一三三七	檀王法林寺 だん王保育園・児童館 信ヶ原良文 京都・三条大橋東詰	群馬教区長 野口善雄 〒376 桐生市本町六一三九八 浄運寺	西住院 戸川靈俊 〒606 京都市左京区黒谷町三〇
近龍寺住職 松濤弘道 〒328 栃木市万町二一四 電話(〇二八)二二一〇八〇二	芳泉寺 柳^{なぎ}楽^ら真^{しん}純^{じゅん} 社会福祉法人 大慈会・かんぎおん 〒386 上田市常磐城三一七四八	光明寺住職 白幡憲佑 〒232 横浜市中区庚台六六	〒440 豊橋市関屋町二二二 悟真寺 住職 立松 辨成 電話(〇五三)五二一五五六

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しく協力下さい。

一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。

一、枚数 四百字詰用紙六〜九枚程度

一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十四巻 八月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十三年 七月二十五日 印刷

昭和六十三年 八月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷特

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八―八二―八七番

舞見御中署

総本山 知恩院

門主 藤井実応

大本山 清浄華院

法主 江藤澄賢

〒170 東京都豊島区西巢鴨三二〇一

大正大学

電話(〇三)九一八七三二一代表

大本山 増上寺

法主 中村康隆

大本山 善導寺

法主 藤堂俊章

〒603

京都市北区紫野北花ノ坊町九六

佛教大学

電話(〇七五)四九一一二四一代表
通信教育部 四九一一〇二三九

大本山 金戒光明寺

法主 稲岡覚順

大本山 光明寺

法主 藤吉慈海

学校法人 大乘淑徳学園
淑徳短期大学

理事長 長谷川良昭

〒174 東京都板橋区前野町五―三―七

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 霊法

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

京都文教短期大学

学長大橋 俊有

〒611 宇治市横島町八〇